

こども
木籠ふるさと便り

発行：
山古志木籠ふるさと会
会長：松井 治二
発行年月日：
平成 24 年 2 月 26 日



本年度もよろしくおねがいします

新年あけましておめでとうございます。去年は、たくさんの方々に支えていただき、みなさんと楽しく過ごせた一年でした。ただただ、感謝の一年でした。

そして、未曾有の震災により悲しみ、混乱に包まれました。多くの方々が被災されたことを、改めてお見舞い申し上げます。少しでも笑顔や希望が見える、明るい一歩を踏み出せたらと思います。

私自身、中越地震で経験した思いを胸に刻み、復興の手助けをしていきたいと思えます。今年もみなさんとの絆をより一層深め、心安らぐふるさとを築き、多くの人に幸せを与えられるように精進していきたいと感じております。

ふるさと会をはじめ皆さんにとって輝かしい年になる事を、心よりお祈り申し上げます。

ふるさと会 会長 松井 治二

賽の神 ～天までとどけ皆の祈り～

1月8日、一足早く、木籠集落の賽の神が行われました。昨年からお付き合いいただいている福島、南相馬の皆さんも来ていただいて、賽の神作りから、餅つき、みかん撒き、雪遊び...みんな一緒に楽しみました。市内外からも、この雪深い木籠に、沢山の方々が足を運んでくださいました。「ありがとう」をみんなで歌い、支えていただいている皆さんへの感謝の気持ち、これから福島の方々と一緒に少しでも前を向いて歩いていけるよう、天に昇る炎に皆で思いを込める。「山古志の雪は暖かった...」とおっしゃった方がいました。

雪は楽しい！！

俺はここに
住みてえ



【記念写真撮るよ～ みんな集まれ～！】



【イカ釣り？】



【福島のみなさん、寒い中、ありがとう
これからも一緒に歩いていきましょう】

【愛を込めて編んでいます】



福島 南相馬を訪問して・・・

11月15日、この春、長岡に避難してきて、田植えや闘牛招待などで交流を持った南相馬の皆さんが暮らす、仮設住宅2ヶ所に山古志闘牛会とふるさと会が共同で訪問いたしました。

この夏闘牛場で行なった童謡コンサートのテノール歌手、小松田さんをお願いして、仮設でのふるさとコンサートの開催と、闘牛大会や郷見庵での募金を活用して、200名の方達にお米を贈呈し住民の皆さんを激励いたしました。

この地区は震災と津波と原発に苦しまれ、仮設にも色々な立場の方達が抽選によりはっています。今まで知らない人たちの集まりとしてコミュニティーを形成しているため、なかなか難しい問題があります。行政の取り決めに振り回され、複雑な事情を抱えながら集団生活を送ることを強いられている方々も多いです。（例えば町の中央部に原発30km圏境界が通っているため、家は隣同士なのに助成金が出たり、出なかったりします。また、津波で家が全壊の方や、家は無事でも20km圏内のためいつ戻れるか分からない方もいます。）簡単には割り切れない、様々な気持ちを抱えながら、色々な方々がこの仮設住宅で暮らしていってました。

コンサート終了後、津波災害の海岸に案内して頂きました。南相馬は放射能避難関連の報道が優先され、津波被害については殆ど報道されなかったようですが、10mを越える津波により平野部の市街地のかなりの部分が壊滅状態となっており、海岸線から2kmほどの所まで何十隻の船が転がっている状況を目の当たりにいたしました。

仮設の皆さんに震災復興の山古志からの思いが少しでも伝わってくれることを願っております。（事務局長 石井）



南相馬を訪問して

杉野 ミサ子

東日本大震災発生から十一カ月余りの月日が過ぎ、私はいつか南相馬に行きたいと思っています。

その訳は、昨年田植えにお手伝いに来られた宍戸さんとの出会いでした。お別れの時、宍戸さんが着ておられたTシャツに「南相馬に行きます」と書いたことです。

十一月十五日の訪問に参加させていただきました。当日は朝早く出発し、南相馬に近づくにつれて、スーパーマーケットのカーテンは閉まり、ガソリンスタンドは鎖に囲まれ、民家は見るからに人が住んでいない様子も無く、人間の営みが突然消えてしまったかのようでした。

途中、学校の校庭に子供たちが五、六人、マスクもしないで元気よく遊んでいました。ほっとした一瞬でした。

仮設に着き、身を切る寒さの中、大勢の人たちがすでに集まっておられ、宍戸さんとの再会。言葉もなくただ涙・・・もう一人三条の体育文化センターに避難されていた方にお会いし、本当に良くしていただいて有難うと何度も・・・「有難う」の言葉の重さに、返す言葉はありませんでした。

二か所の訪問を終わり、車中思いました。この長い道のりを、地震、津波に加え、放射能という目に見えない敵の為に、手荷物一つで逃げてこられた事を思うと、胸が痛み、ただ呆然と外を眺め家路に着きました。

最後に、震災は人の弱さも強さも・・・だから、紡ぐ時間がうれしく、ありがたいと思います。





仮設住宅で歌う小松田さん

“山古志木籠集落ふるさと会”の方々が、被災地南相馬市を訪れるのに同行させていただいたのは、昨年11月15日のことであった。山古志に脈々と培われている背負いきれないほどの“助け合い”と“奉仕”の心、山古志産コシヒカリの新米、そして、ささやかな私の“童謡唱歌ふるさとコンサート”の企画を携えての復興応援の旅であった。東北自動車道から阿武隈高地を越えて南相馬に着いたのは、初雪の予報が出ている底冷えのする日の午後であった。仮設住宅広場にてコンサートを開演した。被災の辛さを癒し、心の和みになればと、集いし住人の前で必死に歌った。同行した妻も音響操作に懸命に取り組んだ。身体を揺らしながら聞く人、手拍子を取りながら聞く人、涙しながら聞く人、共に口ずさむ人等々、皆一生懸命に受け入れてくれた。コンサートは二箇所で開催したが、いずれも最後に、制定されたばかりの「南相馬市民の歌」を披露した。こ

の市民の歌は、震災のために市民には未だ届いていないことを私は知っていた。せめてこの仮設住宅の方々にだけでも届けたいという一心で歌った。前南相馬市議会議員の菅野秀一氏ははじめ、多くの方から「こんな歌だったの、初めて聞いたが中々良い歌だね…」との感想をいただいた。この「市民の歌」に盛られている美しい「野馬迫の里」「紅梅の里」「万葉の里」が、元の故郷に復興し、市民の誰もが心の底から笑顔で声の限りに歌える日が、一日も早く訪れることを強く祈る。“南相馬市ここに生きて 明るい朝を 共に迎える”この歌詞は“南相馬市民の歌”の最後を高らかに歌い上げる一節である。

松井治二会長の熱い思いに引かれての福島震災復興応援の旅は、ふるさと会の皆様のゆるぎない固き復興魂によって大きな成果を収めたと思う。同行させていただいたことに心からのお礼を述べたい。

このような共に痛みを分かち合いながら希望を見出す有意義な交流の継続は、必ずや真の“日本のふるさと”誕生につながっていくものと確信する。“山古志木籠集落ふるさと会”の存在意義は大きい。

南相馬からの手紙

穴戸 晃

もう泣かないと 自分に約束したのに
泣かせるのです 優しい山古志の
皆様の愛の心が 涙を溢れさせるのです
激励の電話、手紙、地蔵様の支援
こんなに応援していただいているのに、
くじけていられるかと 自分に叱咤する。
空を見上げると 震災前と同じ空
空が変わった大地を見て 泣いています
放射能に汚されても ここがふるさとです
生まれ育った 故郷です



木籠で再会 (^v^)/

長岡で避難生活を送る方々より・・・
福島市 今井巧
千年に一度の歴史の中に生きた年でした。
旧年中の心温まるご支援ご芳情に心から感謝を申し上げます。(中略)
避難生活も一年になろうとしています。政治の方針がころころと変わり、私たちも翻弄されるばかりです。国の方では、二十キロ圏内(南相馬市他)は四月ごろ解除になるようだと言っていますが、私たち、小高町の住民は、双葉郡浪江町の隣接部落と続いております。私の家は、目の前が浪江町です。
双葉郡と相馬郡の郡境という場所に住んでいるので、電気も水道も浪江町の方から引いています。地下水(井戸水)なので、線量が低いといっても、山の方が高く、下に流れてくるので、徹底して調べてもらってからでないと、安心して帰れません。それに集落といっても、下部落(浜の方)の集落には家も建てられないし、現在残っている家が、五十軒くらいの集落で、一年以上も住まなければ、家も傷んでくるし、ボイラー、浄化槽、ポンプ、屋根など、家に入るまでにはまだまだ大変だと思っています。それに田んぼは、海水が入っていて、道路の高さと同じくらいになっていて、まだ水もひけていません。
そんなところに、すぐ帰れと言われても、私たちは生活関連は、浪江町が近くに帰ってこなければ、小高区として、戻っても住める状態ではありません。政治家の人たちが包み隠さず、情報を明確にし、一日も早く、安心できる生活になれるよう、願っています。まだまだ寒い日が続きますので、元氣にお過ごしくださいませ。

自分には 山古志にも故郷がある
本郷に 心の故郷がある
前へ歩くと 押してくれる人々がいる
力づけてくれる 皆様がいます
負けてたまるか!
故郷で生きていて良かったと、
約束を破って 涙流して進みます

みんなで忘年会 ～笑う門には福来る～

12月10日、種芋原のあまやち会館において長岡で避難生活を送る福島の方達（お子さんを含めて21名）をお招きして総勢67名の忘年会が開かれました。

挨拶の中で福島第一原発に隣接する双葉町から避難されている高江さんが何時帰れるか分からぬ望郷の思い、そして子供たちの未来に対する心配を語っていただき、改めて災害に対する 思いを共有いたしました。

その後はバザーや蕎麦打ち大会の収益活用でグレードアップした福引大会やカラオケ大会で 大いに盛り上がり、新しい年への希望に向けての大きな活力となる忘年会でした。



【高江さんの挨拶】



【福引き大会始まるよ～】



【大当たり～・・・何が当たったの？】



【みんなでカラオケ】



【賽の神にて】
榎さん(左)と川瀬さん(右)

ふるさと会 忘年会

被災して長岡へ避難してから十ヶ月、松井会長をはじめ、長岡の人々、山古志の人々にはすぐくお世話になりました。いろいろと心が落ち込んでいたときに、何か力を与えてもらっている気がしました。

松井会長から、角突き千秋楽の日に忘年会に参加してといわれ、ありがたい気持ちでした。人と会っているときは心理的に普通なのに、一人になると孤独になってしまう。山古志の人と人のふれ合いは、何か生きている感じが取り戻せる、そんな場所でした。いつしか、人間って温かいんだな、と思わせてくれる場所になっていました。そんな中でこの忘年会は、すごく待ち遠しかったというか、そこに行くことによって震災での出来事を忘れさせてくれる、心がすごく安らぐ場所でした。

南相馬に戻れない今、今年は一年がすごく長く、短く、何をしているのか、どこにいるのか、何があったのか・・・途中から何が何だかわからないまま、ただ流されて今まで来たようで、でも忘年会に参加させてもらったおかげで、今年も終わるんだなと考えることが出来ました。

山古志の歌が心に響いて、何もかもすごく楽しかった、すごく温かった、そんな気持ちになった忘年会でした。いろいろな人たちが見守ってくれているという思いと、一人じゃないんだという気持ちの中で、何か力をもらった感じで、これから自分自身も頑張るぞと思いました。そんな絆をいっぱい感じた忘年会でした。

川瀬 利春

忘年会に参加して

去年はありがとうございました。

榎 富夫

忘年会は、山古志の皆様の熱い気持ち、私達避難者一人一人の胸に届いた一日でした。松井会長をはじめ、木籠ふるさと会の皆様と、闘牛会の皆様には、感謝してもしきれないと思っております。また、大勢の山古志応援隊の皆様方とも、楽しく話し、笑って、飲んで・・・、辛く悲しい気持ちを忘れることが出来ました。ありがとうございました。

今年一年は、除染の一年だと思っています。

その結果、安心して安全に暮らせるのか？野田首相の原発事故収束発言！野田首相は1月8日に福島へ行ったそうです。何を話し、何を約束しても、絶対に実行されることを願うばかりです。

ふるさと会に、「元気のネットワーク」の皆さんが、新しく仲間に入ってくださいました。木籠の方々とは、中越大地震からのご縁です。今回、被災地応援米や忘年会など、福島・南相馬の方々の支援を通し、ふるさと会と一緒に活動をしてくださいました。

長岡に住んでいる福島の方たちと縁を結んで

「元気ネットワーク」 高橋 あゆみ

山古志木籠ふるさと会で出会った人々が少しずつ、つながっていきけますように！松井さんは、新しく会に入った元気のネットワーク(長岡市・佐藤代表)と南相馬の方たちのお宅を訪ねました。槇さんが、新産の避難所で仲好くなった、若いママたちも呼んで、ミニお茶会。

避難の状況を槇さんに伺いました。12日の夕方に、「避難が出来る人は避難をしてください」という、車から流れるスピーカーの声を聞いて、何も持たずに、車で家を出たそうです。槇さんは、エプロンをかけたまま、車に乗り込みました。槇さんのお宅には、津波の被害で、親戚の方が2家族一緒にいましたので、夕飯に準備したおにぎりだけを持って、走り出しました。槇さんの家は福島第一原発から20キロのところにありました。

槇さんの家族が6人、親戚の方が8人で避難しました。ガソリンのない車は1台置いて、車4台で二本松に向かい2泊。その後、会津で2泊して、新潟県に来ました。新潟市の避難所は人数が多く、落ち着かなかったため、長岡まで来ました。新産の体育館は、最初に入ったときに、雰囲気があったかいように感じたそうです。親戚の方たちは、湯沢まで行きました。

槇さんは避難所の中で、双葉からきた高江さんと出会いました。高江さんは、生後間もない赤ちゃんを抱えて福島から避難をしてきました。首が座っていない赤ちゃんを横抱きにして、もう一人、3歳にならないお子さんを抱えて、どんなにか不安がいっぱいだったことでしょう。高江さんは、本当のお母さんのように槇さんを慕っています。高江さんの新産の避難所での暮らしぶりを聞いて、お姉さんの林さんもやってきました。林さんのお子さんは、長岡市内の中学校と高校に通い始めました。

ミニお茶会では、原町出身の酒井さんも加わって、元気のネットワークの佐藤さんと育児について、語りあうひとときもありました。

今は、新産の避難所で知り合った方たちが、同じ長岡市の住宅に住んでいらっしゃいます。槇さんたちは、木籠の松井さんと出会う、木籠の行事にも参加しています。それでも、なかなか福島から避難している人同士や、長岡の人とつながっていく機会は、そんなに多くありません。少しずつでもご縁がつながっていきますように、願いを込めて、松井さんをはじめ木籠の方たち、ふるさと会の方たちは力を尽くしています。



細く長〜くいつまでも 千年繫がれふるさと会

ふるさと会の恒例行事となった蕎麦打ちが、11月20日に行われ、今年もおいしいお蕎麦に皆で舌つづみを打ちました。

蕎麦は、痩せた土壌でも栽培できる、たくましい穀物です。どこでも土壌を選ばず栽培できたため、昔から山間地や新規開拓地でも盛んに作られたということです。たくましいって素晴らしい。

夏の終わりに蒔いた種が、暑い中ぐんぐん育ち、可憐な白い花を咲かせる。この「ふるさと会自家製蕎麦粉」を使って毎年皆で蕎麦を打つ。こんな恒例行事がいくつも、いつまでも、ふるさと会で続きますように。それに繋がる人々がいつまでも、どこまでも繋がりますように。



山古志産の蕎麦粉を使つての蕎麦打ち大会は、私が楽しみにしていた行事の一つでもあります。
当日は、大勢の方々が集まり、和気あいあいとした雰囲気のなかで、蕎麦打ち体験をさせていただきました。
美味しい手作りのそばの味に、お腹も心も大満足の日でした。

(ふるさと会 高野美栄子)

【ふるさと会 今後の予定】

5月3日予定 春の道普請 ふるさと会総会
雪解けと緑の芽吹く里山散策

5月20日ごろ 田植え

5～6月 畑仕事

6月中旬 チマキ、笹団子作り

6月下旬 蛍観賞

※HPで日程、詳細をお知らせします。



豪雪便り

豪雪地帯の山古志としては昨年の2月はじめより、やや少ない積雪でしたがそれでも3メートルを超える雪で、今年も公民館をはじめ、軒並みに各家は1階部分は雪で埋もれ毎日の除雪に追われて下ります。

また、今年は気温の低い日が続き、どこの家でも落下するはずの雪が屋根から落ちず苦勞されてるようで、郷見庵でも天井板を外して暖房し、屋根裏を暖めて屋根の雪を落とすなど雪国ならではの工夫で冬将軍と戦っております。



【左】 公民館



【右】 3メートルの除雪
(上田さん)



郷見庵 ビフォー(対策前)



郷見庵 2階天井



アフター(対策後)

雪と暮らす

松井 浩二

自然豊かでのどかな時を刻む木籠の郷ですが、冬だけは厳しい自然と向き合わなければいけません。
今年は、平成18年豪雪に匹敵する積雪に見舞われ、毎日雪との戦いです。

ほんの一時、雲の隙間から差し込むささやかな太陽の光が、村人にとっては希望の光。疲れきった心を明るく照らし、みんなの顔に少しながら笑顔がこぼれます。本当に春の訪れが待ち遠しいと感じられます。

雪国の人々は厳しい冬をみんなで支え合い、耐え忍んで生きてきました。大きな壁を乗り越える強さも、温もりある里山での暮らしも、ここで出逢う人達との絆も、すべて自然たちが私たちに教えてくれている事。

本当にありがたいと思い、心から感謝しております。



「山古志木籠 ふるさと会」：お問い合わせ、入会ご希望の方は、下記へご連絡ください。

■山古志 木籠ふるさと会 会長 松井浩二 (FAX/電話) 0258-59-2180

■山古志木籠ふるさと会 事務局 担当：石井秀次 (Eメール) cid85830@syd.odn.ne.jp

※活動の様子は、ホームページをご覧ください

山古志木籠ふるさと会 <http://yamakoshikogomo.com/>